
ゆめことらあ

戸井田 康

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆめことりあ

【ZPDF】

Z0120F

【作者名】

戸井田 康

【あらすじ】

「ゆめこ」は小学一年生。クリスマスのプレゼントで貰った、ハムスターのらあと不思議な冒険に出かけます

第一部

毎年、お父さんの作ってくれるクリスマスツリーは、ゆめ子が、大きく見上げても、クリスマスツリーのつぶんが見えないくらい、大きなクリスマスツリーでした。

ゆめ子にうつて、とても、とても、大きなクリスマスツリーで、ゆめ子のお父さんの背の高さと同じくらいの大きさでした。

ゆめ子は小学一先生。大きくなつた歌手か、女優さんになりたいとおもつている女の子です。

毎年、今の、季節になると、ゆめ子のお父さんせ、ゆめ子のお父さんのお父さん、よつするに、ゆめ子のおじいさんのですんでいる家の「つりやま」、クリスマスツリー用のもみの木を取りにでかけます。その時は小さなトラックを借りてでかけます。もちろん、ゆめ子も一緒です。

おじいさんの家は、田舎にあります。そこには、ゆめの好きな、小さな川や、森があります。

おじいさんの家につくと、ゆめ子のお父さんは、おじいさんに声をかけます。

「父さん、てきとうな木を一本、もうひとつねぐよ」

ゆめ子のお父さんは大きな声で、おじいさんに声こぼす。すると、家中から、白い長いひげを生やしたおじいさんがでてきて、トランクに乗つてくるゆめ子を見つけると、顔中を笑顔にして声こぼし

た。

「おお、ゆめ子か、好きな木を持つてこなさい」

「おじさん、ありがとう」

「おじさんは、ありがとうございました。ゆめ子をのせたトライシクは、裏山を上ってきました。お父さんは、トライシクを山のふもとにとめます。

「ああ、ゆめ子、お前のクリスマスツリーにふさわしい木を探してこいべや」

お父さんは言いました。

「レッシ、ゴウ」

ゆめこは元気良く山をかけ上がります。お父さんは、ゆめこの後を少し遅れて、ついていきます。

おじさんは山の中を三分のクリスマスツリーにふさわしい木を探して歩きまわります。お父さんは、ゆめこが迷子にならないように、元気な微笑みながら、ゆめこあとをついています。

ゆめこは、一本の立派な木の前で立ち止りました。

「おとうさん、これなんかどうかな」

ゆめこは後から歩いているお父さんに言いました。

ゆめ子は大きな、大きな、もみの木をゆびをして言いました。

「ゆめ子、それは大きすぎるよ」

ゆめ子が指差したのは、高さが十メートルはある、大きなもみの木でした。

「やつぱつ、大きすぎるかな」

ゆめ子は頭をかきながら言いました。

「やつだよ。家の中にはいらないよ」

お父さんは困った顔をして言いました。

ゆめ子はまたクリスマスツリーのための木をさがしました。

お父さん、「これなんぞどう」「

次に、ゆめ子が見つけた気がさつきよりは小さけれど、ゆめ子の背の高さより、だいぶ大きな木でした。

「うん、良い木だ」

お父さんは、ゆめ子の見つけた木をなぜながら言いました。さつそくその木の根元を掘りはじめました。根っこが見えてきて、手で搖すると木がぐらぐらと、揺れました。

「ゆめ子、行こうか

そう言つて、お父さんは、ほりだしたもみの木を

「よこしょ

と言つて、肩にかつきました。

「お父さん、すいこ

ゆめ子は大喜びで、はじやぎます。お父さんはトラックに向かつて歩き出しました。今度はゆめ子がその後をついて行きます。トラックにクリスマスツリーを固定せると、家に向かってトラックを走らせました。

家に着きました。大きな植木鉢に、おじこさんの「うり山のもみの

木を植えました。

わあ、クリスマスツリーのかざりつけです。

ゆめ子はお母さんとこっしょに光かがやく、星や、リボン、点滅をする豆電球で、クリスマスツリーをかざりつけます。そのようすを去年生めた、ゆめ子の妹が、不思議そうな顔をして見ていました。

かざり付けが終わりました。とてもきれいなクリスマスツリーが出来上りました。まるで、満天の星空が、ゆめ子の家の中に入つて来たよひでした。

ゆめこはこつまでも飾つづけの終わったクリスマスツリーを見詰めています。

「わあ、わうねなさい」

お母さんが言いました。

「おやすみなさい、お母さん、お父さん」

ゆめ子が言ひと、お父さんとお母さんは、かわるがわる、ゆめ子のほほにキスをしました。

「おやすみ、ゆめこ」

声をそろえてお父さんとお母さんは言いました。

疲れていたゆめ子は、ベッドの中にもぐつこむと、あつとこつまに、夢の世界に入つていきました。夢の中でゆめ子は、沢山のクリスマスプレゼントをもらいました。それはぬいぐるみや、ゲームのソフト、お人形や、かわいい服でした。でも、本当にゆめ子が欲しい物は、その中にはありませんでした。

「よいよ、明日はクリスマスイブです。

朝おあるとお母さんはゆめ子に言いました。

「今日は、クリスマスパーティーの準備をするから手伝ってね」

「うん」

ゆめ子は元気良く返事をしました。でも、ゆめ子の視線はクリスマスツリーのてっぺんに釘付けです。そこには、今夜のクリスマスプレゼントが、のせられているからでした。そこからかすかに、箱をこする音が聞こえてきます。その音を聞いて、ゆめ子はプレゼントのなかみが分かりました。

ゆめ子は今夜のクリスマスパーティーがまちとおしゃべりしかたがないません。

ゆめ子はおかあさんがケーキを作っているところをみつめています。まるで魔法のようにお母さんの手元からケーキが出来上がっていきました。お母さんは生クリームをゆめ子にてわたしました。

「わあ、ゆめ子の出番よ」

ゆめ子はお母さんから生クリームを受け取るとケーキに絞り、のせていました。まだなれていないうめ子はお母さんのように上手には出来ません。お母さんも生クリームをとり、ゆめ子がのせた生クリームの後を直しながら、生クリームでかざつつけをしました。

ゆめ子が手伝ってくれたおかげで、こんなに早く出来たわ。さあ、最後の仕上げよ

お母さんはそう言つと、ゆめ子にかい一杯のイチゴをてわたしました

た。イチ門を受け取ったゆめ子は、それをケーキに飾る手のせました。

「あれこれ出来たわ。ねえ。ゆめ子」

お母さんはずめ子にほほを摺り寄せていきました。ゆめ子も得意げにお母さんを見上げました。

夕方、お父さんは早くお仕事から帰ってきました。『馳走も沢山並びました。七面鳥、やゆめ子の好きなハンバーグ、お父さんとお母さんの好きなワインも並んでいます。

さあ、待ちに待ったクリスマスパーティーの始まりです。

お母さんもお父さんもゆめ子も笑顔で、『馳走やケーキを食べました。お父さんはゆめ子が作ったケーキだと聞いて

「おこしこ、おこしこ」

と言つて、沢山ケーキを食べました。

『馳走やケーキも無くなり、お父さんは少しだけ、ワインを飲みすぎて、眠ってしまいました。お父さんが眠ってしまったので、クリスマスパーティーはおしまこう。ゆめ子もおなか一杯になつて眠くなりました。

「わあ、ゆめ子はねるじかんよ。お父さんはおやすみを言こなさい。ゆめ子は、お父さんをゆすつて起こし、お父さんの頬に、おやすみのキスをしました。お父さんは薄田を開けて、おやすみを言こました。

楽しいクリスマスのパーティーが終わり、ゆめ子がベッドに寝ると、サンタクロースの姿をしたお父さんが、シリーのてっぺんか

ら、ゆめ子のベッドにプレゼントを移します。ゆめ子は毎年、寝たふりをして、サンタさんがプレゼントをベッドに置くのを見ています。お父さんに似たサンタさんが来るのを毎年、楽しみにしていました。お父さんに似たサンタクロースを見ると、ゆめ子は安心して楽しい夢の世界に入りました。

朝が来ました。枕もとに探しました。昨夜、お父さんに似た、ゆめ子はサンタクロースが置いたプレゼントを探しました。すぐにそれは見付かりました。

それはクリスマスツリーの下に飾られていた小さな箱でした。箱の中からあの時と同じように箱を引っかく音が聞こえきました。ゆめ子は箱をそっと持ち上げ、箱のすき間から中をのぞこうとしました。でも中は暗くて見えません。ゆめ子は少しだけ箱を振りました。箱の中から引っかく音が聞こえます。中身はゆめ子が予想した通りのようです。

ゆめ子は急いで箱を開けました。早く、中身を確かめたかったからです。箱が開きました。ゆめ子は慌てて中をのぞきます。中から、小さな生き物が顔を出しました。それがなんか分かっていても、ゆめ子は大きな声を出しました。その声を聞いて、お父さんとお母さんが小さなかごを持つて、ゆめ子の部屋に入つて来ました。

「ああ、ゆめ子、それを手の上にのせて」

ゆめ子は言われたとおり、箱を逆さまにして、箱の口を下にして手のひらを置きました。中からさつきの小さな生き物がすべり落ちてきました。

それは、ハムスターでした。

小さなからだに、大きな目を持ったハムスターが、ゆめ子の手の

ひらの上でふるえていました。

震えているハムスターを見て、ゆめ子は心配そうにお父さんと、お母さん交互に見回しました。

お父さんと、お母さんは、黙つてゆめ子に向かつて顔をます。

「大丈夫だよ。安心して」

ゆめ子はハムスターに向かつてそれやきました。ハムスターは黒田だけの大きな瞳をさらに大きくしてゆめ子を見上げ、鼻をひくひくさせています。

ゆめ子は自分の鼻をハムスターの鼻にくつづけて言いました。

「お前の名前は今から、りあ、だよ」

「あは、首をかしげてゆめ子を見ていました。らあはハムスター用の小さなかごに入れられました。らあは自分の入れられたかごを大きな前歯でかじりました。らあは何時までも何時までも、かじっていました。ゆめ子はその様子を飽きることなく見ていました。ゆめ子は、らあがかわいくて、かわいくて仕方がありませんでした。

らあがゆめ子のところに来てから、ゆめ子とらあは、何時もいつしょでした。らあをかごからでしても、ゆめ子のそばにいて、逃げたりはしませんでした。らあはゆめ子の肩の上が大のお気に入りでした。らあはいつもゆめ子の肩の上でゆめ子の顔を見ていました。

ゆめ子といあの楽しい日々が丁度一年になりました。ちょうど一年ですから、その日はクリスマスです。クリスマスの真夜中、ゆめ子をゆりうごかすものがいました。

ゆめ子がねむご田をひさつて起きたと、ゆめ子をゆすつていたものは、体がゆめ子の半分ほどの大さになつたらあでした。

ゆめ子はおどりこて、大きな声を出しちゃつとなつました。らあはゆめ子の口に手を当てて

「じい、大きな声をだしちゃダメだよ」

らあはゆめ子に小さな顔でわからました。ゆめ子はまたおどりをました。らあがしゃべったからです。らあはまたゆめ子に向かって言いました。

「わあ、ゆめ子行くわ」

らあはゆめ子の手を取つて言いました。

「行くわ、行くくゆくの」

ゆめ子は立ち上がりながら言いました。

「うあにつけくればいいのや」

やうひつひと、らあはゆめ子の手を強くにぎつ、軽くジャンプしました。ゆめ子には軽くジャンプしたように見えたのですが、らあは、ゆめ子の手をにぎつたまま畠に浮かび上がりました。

「ゆめ子、らあの体につかまつて」

らあがやうひつ言いました。ゆめ子は、らあの腰にじがみつきました。

「ゆめ子、しつかりつかまつたか」

らあはゆめ子に言いました。

「うそ」

ゆめ子は大きく頷きました。ゆめ子が頷くのを見ると、らあは、飛び始めました。

「わあ」

ゆめ子が声をあげます。

「わあ、ゆめ子、いくよ」

「あはやう言つと、天井に向かつて飛び上がりました。天井が目の前にせまります。ゆめ子は、らあにしがみつく腕に力をこめました、天井にぶつかった時の衝撃にそなえるためです。ゆめ子はきつく田を闇じました。

ゆめ子の頬に風が当たりました。ゆめ子はゆっくりと田をあけました。田に飛び込んできたのは、ゆめ子の部屋の天井ではなく、大きなお月様でした。らあとゆめ子は、天井を突き抜けたようでした。

「わあ」

ゆめ子は叫びました。らあは振り向いて、言いました。

「ゆめ子、らあの世界と一緒に行く」

「らあの世界いつて何処にあるの」

らあは、満月を指差して言いました。

「あれを通りぬけるんだ」

らあは、飛ぶスピードを上げました。

「わお」

ゆめ子がまた声をあげます。

月が見る間に大きくなりました。田の前がお月様で一杯になり、一瞬暗くなりました。すぐにまぶしいくらいの光がゆめ子を包みました。らあの世界についたのです。

ゆめ子が、らあの背中から見下すと、あたり一面に黄金のよ

に光り輝く、ひまわり畑が広がっていました。ひまわり畑はどこまでも、どこまでも、広がっていました。らあは無限に続くと思われる広大なひまわり畑の上空を飛び続けました。やがて大きく曲がりくねった七色に色が変わる川が見えてきました。ゆめ子はその川の美しさに見とれてしまいました。川の大きく曲がった場所に、小さな平野がありました。らあはそこに向かっておりていきます。近くと、その平野に沢山のハムスターが、らあとゆめ子に向かって、手をふっていました。

らあはハムスター達の中心に降りました。ハムスター達は口々に「いらっしゃい、ゆめ子。良くな」と言つて、ゆめ子に握手を求めました。

「ゆめ子、らあの仲間達」

らあはそう言いながら、仲間達と抱き合つていました。ゆめ子も、ハムスター達の手をにぎりました。ゆめ子は忙しくらあの仲間たちの手をにぎりました。

「ゆめ子、これが、らあの生まれた世界」

「気が付くとゆめ子の後ろに、らあが立つていました。

「さあ、ゆめ子、始まるよ」

らあが言いました。

「らあ、なにが始まるの」

ゆめ子が、らあに尋ねました。らあが答える前に、先ほどまで騒いでいた仲間のハムスター達が急にだまりこみ、川に向いて並びはじめました。ハムスター達は、一列になつて川に沿つて川の流れを見詰めました。ゆめ子も、らあに尋ねるのを止め、川を見ました。

川はさつきまで、七色に輝いていたのが、ねずみ色に変わつて流れしていました。

ゆめ子とらあの仲間達は川を見詰め続けていました。

見詰め��けていると、川の上流から黒いボールのような物が流れできました。大きさはゆめ子が抱えられるくらいの大きさでした。

それが一つ、二つ、三つ、と、ゆめ子達の前を流れていきました。らあの仲間達が歌いだしました。それはレクイエムでした。らあとその仲間達はレクイエムを重々しく口ずさみました。だんだん歌声が大きくなっています。それに合わせるように、流れてくるもののが多くなっていきました。すぐに広い川幅一杯になりました。数え切れないくらいの沢山のボールが流れてきます。ボールはよく見ると、それぞれ違っていました。同じようにみんな丸くても、色、大きさが少しずつ違いました。

らあ達の歌声はさらにおもおもしろく、かなしげになつていきました。らあと仲間達のひとみから、大粒のなみだが流れだしました。つぎから「わから」と、たくさんのなみだのじずくが流れおちていきました。

らあ達の悲しげな様子を見ていたら、ゆめ子も悲しくなり、泣きたくなつてきました。ゆめ子は泣き出しました。大きな声を出してらあ達と一緒に泣きました。

泣き続けるゆめ子に、「あがやせし」と言いました。

「ゆめ子、なぜ泣いている。ゆめ子はなかなかいい。泣くのは、らあ達の仕事」

ゆめ子はなみだで泣きはらした大きな田でらあを見詰めました。

「ゆめ子、らあ達がなぜ川に流れしていくボールを見て泣くのかしり

たいか」

らあはゆめ子を見上げてたずねました。ゆめ子は大きくなづきました。

した。

「ゆめ子、川から流れてこのボールは、死んだ人達の、思いなんだ。ゆめ子、死つて」なんだか解るかい」

らあがゆめ子がたずねました。ゆめ子は頭を左右にふりました。頭をふつたひょうしにゆめ子のなみだも左右にとびちりました。

「ゆめ子、もう少し大きくなればわかるよ。らあ達は、死んだ人達の思いを、みおくつているんだ。人は死んでしまうと、思いがぬけ出して、ボールみたいなかたちになるんだよ。そしてこの川にながれこむ。それが、らあ達のところにたどりつくんだ」

ボールのかたちになつた思いは、つきからつきと流れできました。

「ゆめ子、その思いのもつかなしみをなぐさめるために、らあはなみだをながすんだ。それがらあ達の仕事。その仕事の為に、このひまわりのさきみだれる世界が、らあ達にあたえらたん。このひまわりはゆめ子のところのひまわりとはちよつとちがうんだよ」

らあはそう言つて、ゆめ子のひまわりの種をわたしました。渡されたひまわりのタネはとても大きく、やつとゆめ子の手のひらに隠れるくらいの大きさでした。ゆめ子はひまわりのタネを落とさないようこ右の手のひらで強く握りました。

ボールのかたちをした思いは、川をおおいつくしながら、ながれつづけていきました。ゆめ子はらあ達といつしょに、いつまでもなみだをながしつづけました。

ゆめ子は田を覚ましました。ゆめ子自身の泣き声で、田を覚ました。

ゆめ子の口にやわらかく、あたたかくねじる、ことしこものがふれました。らあでした。らあは小さなして、ゆめ子の口にキスをしていました。

「らあ」

ゆめ子は、らあの名前をよびました。らあはゆめ子を大きな黒田だけのひとみでみあげていました。

「らあ、あれはゆめだったの」

ゆめ子はらあをやせし手でつづみこんでたずねました。

らあはゆめ子をみあげつづけていました。ゆめ子は自分の右手の中に、なにかにぎりつていふ事に気が付きました。ゆめ子は右手をゆっくり開きました。手の中にはとても大きなひまわりのタネがありました。あの世界で、らあにもらつたひまわりのタネです。ゆめ子はらあの顔をのぞきこみ、ほほえみました。らあはそんなゆめ子にむかつてウインクをしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0120f/>

ゆめことらあ

2010年10月28日05時37分発行